



# 仕掛

会員 佐賀 豪 (61期)

冬、伊豆半島の知人宅で「おい。起きろ。朝だぞ。出船の時間に間に合わない。はやく着替えろ!!」と私は叩き起こされた。時刻は午前5時。外はまだ暗い。

コンビニでヴィターインゼリーと500MLのペットボトルを購入し、車で港に向かう。

港では、船が出港の準備中だった。我々が到着するやいなや、船長は舳をとき、エンジンを始動した。船は岸を離れ、やがて港の外に出る。エンジン音が高まり、船はスピードを上げた。水平線上に太陽が現れ、顔の頬にあたる風で徐々に目が覚めてきた。

伊豆半島の沖合を南へと進む。時折、舳先から波しぶきが私の顔にかかった。港を出て30分も経過したころ、船はエンジンを停止した。今日の獲物アマダイのポイントに着いたらしい。船が進んでいるときは感じなかったが、停船したとたん、船首は1M以上も上下に揺れだした。実は波が非常に高かったらしい。船首の竿の場所までいくのも手で体を支えながら歩いていく状態だった。竿のある場所までたどり着き、一つの鍬にオキアミという甲殻類を2匹ずつ仕掛け、カゴにも撒き餌用のオキアミを大量に入れて仕掛が完了。

**アマダイは** 冬場のこの時期、水深60M～100M程度の海底にまで上がって生息する。船長が魚群探知機を使い、アマダイらしき魚影のある棚までの水深を告げてきた。告げられた水深から1～2M上に仕掛が漂うよう釣り糸を海面に落としていく。カゴの重さで釣り糸がどんどん竿からでていく。釣り糸のメーター表示から100M程で釣り糸がでたところで、釣り糸が急に止まった。どうやら棚に着底したようだ。2Mほどリールを巻き上げカゴからオキアミがでるように竿



を二度ほど振り上げる。あとは獲物が餌に食いつくのを待つだけだ。潮の流れで水深にくらべ釣り糸が大量にでてしまう場合は、海底の潮の流れを想像しながら釣り糸をキープしなければならない。外道（他の魚）が餌をつつつくこともある。単に竿を垂らしておけばよいわけではない。時々竿をあげて仕掛の様子を窺いながら、今回の獲物であるアマダイを待った。数時間が経過し、缶コーヒーでも飲もうかと思って缶に手を伸ばした瞬間、「ぐーーーーー」と鈍い音をたてて竿先が海面へと突然引き込まれた。「なんじゃこりゃ」と思った矢先、知人の「佐賀～アマダイだ!!」との叫び声が耳に届いた。我に返った私はすぐさま竿を手にとった。「重い。竿が折れる。」と感じるぐらい竿は引っぱられた。知人から竿を立てないと折れると怒鳴られたが、竿を立てた途端折れてしまうのではと感じた。しかし、知人の竿だからと思い直し、思い切って竿を立ててみると、さらに撓ったものの、折れなかった。竿からアマダイの力強い引きを感じていたが、徐々に引きも弱くなってきたとたん、海面にお目当てのアマダイが現れた。その後アマダイは刺身に変身!!（アマダイの身は水っぽいため、早いうちに食べないと風味を損なうとのこと。そのためあまり市場に出回らないらしい。）

**釣りは** その大半が「待ち」の時間。気の短い私の性分には合わないと思っていたが、あのアマダイの竿の引きを味わってしまった日以後、あの手の感触をまた味わいたいと思うようになった。どうやら私も釣りの魅力に魅せられてしまったようだ。今年のアマダイのシーズンが待ち遠しい…。